フォーカシング的態度における諸因子と反復性との正の相関に関する一考察

―私的自己意識および自己没入を上位概念としたモデルの検討―

髙　沢　佳　司（皇學館大学）

〈要旨〉　これまで構造拘束的な体験様式である反復性と、フォーカシング的態度の注意や日常生活におけるフォーカシング的経験の体験の感受との正の相関関係が報告されてきた。本研究ではこの原因を探るべく、初めにこの相関関係の再現、続いて私的自己意識と自己没入を上位概念に据えた構造方程式モデリングによる変数間の関連性の検討を行った。その結果、単相関では前述の正の相関関係が再現された。一方、構造方程式モデリングの結果からは、私的自己意識が注意のみに影響を与え、自己没入は反復性と体験の感受とに影響を与えることが明らかとなった。また、反復性と体験の感受との標準化偏回帰係数（偏相関）は有意なままであった。正の相関関係の源泉がどこにあるのかについて、反復性と注意、および反復性と体験の感受それぞれの関係性について議論がなされた。

〈キーワード〉　構造拘束的な体験様式、フォーカシング的態度、反復性、私的自己意識、自己没入

問題と目的

ここ20年程度を概観すると、我々の体験様式を測定する研究の流れは、海外よりもむしろ国内のほうがやや盛んなきらいがある（for a review, Krycka & Ikemi, 2016）。特に、構造拘束的な体験様式を測定する構造拘束度尺度（SSB；髙沢・伊藤 , 2009）が開発されてから、その9年後に改訂構造拘束度尺度（SSBE-R；髙沢 , 2018）が作成された。構造拘束的な体験様式とは、「体験過程の暗黙の機能が欠損してプロセスを排除した構造だけが存在し、体験過程が構造化され、また次第に構造そのものとなる」（Gendlin, 1964, p. 23）様式であり、ネガティブな思考内容が反復し（i.e., 反復性）それに対して傍観している（i.e., 傍観性）体験の仕方である（髙沢・伊藤 , 2009; 髙沢 , 2018）。近年、この改訂構造拘束度尺度の妥当性をさらに検証しようとする試みがなされ、改訂時と併せて弁別的妥当性や収束的妥当性以外の側面による妥当性検証がなされた（髙沢 , 2021）。

近年、SSBやSSBE-Rの反復性因子が、フォーカシング的態度を測定する体験過程尊重尺度（FMS）改訂版（森川・永野・福盛・平井 , 2014）の注意因子との正の相関（髙沢 , 2021）、日常生活におけるフォーカシング的経験尺度（FES）の体験の感受因子との間に正の相関（上西 , 2012）が見られることが分かってきた。フォーカシング的態度とは「からだに注意を向けながらゆったりとした心構えで待つといった、ある種の態度」（福盛・森川 , 2003）である。また、日常生活におけるフォーカシング的態度とは、「日常的に自己の内部に流れる曖昧な感覚（フェルトセンス）に触れ、それらに対して適切な距離を取り、言語やイメージによる象徴化過程を経て、受容的で共感的な姿勢のもとに、行動を表出しようとする態度」（中谷・杉江 , 2014）である。もともとGendlin（1964）によって、体験過程には過程進行中か構造拘束的かといった対比関係があることが論じられている。過程進行中の体験様式とは、「体験過程が象徴との絶えざる相互作用のもとに自己の中でいきいきと作動している」（末武 , 1986）と説明されるが、フォーカシング的態度はこのような過程進行中の体験様式と合致するものと考えられる。つまり、本来的な概念の示す意味合いとしては、反復性とフォーカシング的態度との間には負の相関が見られ

る、というのが理論的な予測である。しかしながら髙沢（2021）や上西（2012）の調査ではこの予測と矛盾した結果が得られている。

ではこの結果の背景にはどのような要因が考えられるのであろうか。上西（2012）は体験の感受と反復性との正の相関に関して、「フェルトセンスを感じている状態は心理的距離が近い、あるいは取れていない状態と考えることが出来る」とした上で、増井（1990）の指摘したフェルトセンスの機能として「ああでもない、こうでもない」と迷わす側面や「こうにも感じられる、こうとも感じられる」等といったバランスを取る側面を紹介した。この一見矛盾する点に関する上西（2012）の見解は、「フェルトセンスを感じることに加えて、迷いながらも体験過程の流れを硬化させずに推進させていく能力がより重要である」と述べている。このようにフェルトセンスの機能から見ると、先述の理論的予測に反する結果が起こりうることは理解できる。

反復性と注意や体験の感受との正の相関に関するもう一つの説明としては、各概念の上位概念として、そもそも自己の内面に注意が向いているという共通点が存在するためであるとも推論できる。つまり、認知的な方略として内面に注意を向けるという作業自体が反復性、注意、および体験の感受にとって、似通った作業であることは論を待たない。具体的には、私的自己意識（i.e., 自己の内面への意識；辻，1993）という現象は、過程進行中の体験様式であれ、構造拘束的な体験様式であれ、あるいはフォーカシング的態度であれ、いずれにも共通した現象として生起している。これが反復性、注意、および体験の感受に関して概念的重複を生起させ、測定値同士が正の相関関係を呈する原因となっているのではないだろうか。

さらには、自己の内面に注意を向ける際に、もともと否定的な思考に没頭しやすい性格特性を強く保持した人がいわゆる構造拘束的な体験様式（ここでは反復性）に陥りやすく、そのような性格特性が相対的に低い人はそのような堂々巡りを起こさずに済む可能性も考えられる。また、体験の感受についてはその質問内容から私的自己意識の他にも心身症的な側面を捉えている可能性が指摘されており（髙沢，2021）、否定的な内的構成概念への着目という点では自己没入（i.e.,（否定的）自己に対する注目の持続；坂本，1997）と共通する成分

がある可能性が否定できない。

このような視点から、反復性と他のフォーカシング的態度の因子との正の相関関係について捉え直すことを試みることとする。つまり、各概念が捉える現象の上位概念としての私的自己意識や自己没入が存在し、下位概念として存在している反復性、注意、および体験の感受といった現象そのものの共変関係を形成しているのではないかと考えられる。本研究では次の２点を明らかにすることを目的とした。（１）反復性と注意、および反復性と体験の感受の間の正の相関関係が見られるかどうか追試すること、および（２）上述の推論から構築した、私的自己意識と自己没入を上位概念とし、その２つの上位概念が下位概念としての反復性、注意、および体験の感受にどのように影響しているのかを明らかにすることである。

方法

１）調査参加者

参加者は 120 名（女性 41 名）、平均年齢は 19.58 歳（*SD* = .71）であった。そのうち、回答に不備のあった 12 名を除外し 108 名（女性 40 名、平均年齢 19.60 歳、*SD* = .72）を分析対象とした。

２）測定尺度

（１）私的自己意識・・・辻（1993）の自己意識尺度のうち、私的自己意識に関する５項目を用いた。

（２）自己没入・・・坂本（1997）の没入尺度（11 項目）を用いた。

（３）注意・・・森川・永野・福盛・平井（2014）の FMS-18 のうち、注意に関する６項目を用いた。

（４）体験の感受・・・上西（2011）の FES のうち、体験の感受に関する５項目であった。

（５）反復性・・・髙沢（2018）の SSBE-R のうち、反復性に関する８項目を用いた。

なお参加者の利便性に配慮し、選択肢はすべて「1. 全く当てはまらない」～

「7. 非常に当てはまる」の７件法による測定に統一した。

３）手続き

調査はすべてオンラインで行われた。参加者は研究目的・倫理的配慮（データの厳重な管理、自由意志による参加、途中終了の自由、問題発生時のアフターフォロー、研究代表者の連絡先、結果の開示方法･場所、等）について熟読し、書面によってインフォームド・コンセントを得た後、質問紙に回答した。尺度の実施順序、および尺度内の質問項目の順序はカウンターバランスを取った。回答終了後、デブリーフィングを行い調査終了とした。

結果

データ解析にはフリーの統計解析マクロであるHAD（清水, 2016）を用いた。

１）記述統計量、信頼性係数、相関分析

まず記述統計量を算出し、続いて測定尺度得点のα係数を算出した（表1）。その結果、すべての得点において十分な信頼性が確認された。続いて測定した変数同士の相関分析を行った（表2）。その結果、すべての変数の組み合わせで有意な正の相関が確認された。特に本研究の目的の１つにも関係する、反復性と注意、および反復性と体験の感受との有意な正の相関は、先行研究（髙沢, 2021; 上西 , 2012）の結果を再現することとなった。

表 1. 記述統計量および信頼性係数

	平均値	*SD*	α係数	95% 下限	95% 上限
私的自己意識	20.361	6.438	.874	.832	.908
自己没入	35.000	10.198	.914	.888	.936
注意	19.926	5.750	.868	.825	.903
体験の感受	17.361	4.992	.826	.768	.873
反復性	37.472	11.691	.933	.912	.950

表 2. 相関分析結果

	Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ		Ⅴ
Ⅰ. 私的自己意識	-								
Ⅱ. 自己没入	.574	**	-						
Ⅲ. 注意	.577	**	.367	**	-				
Ⅳ. 体験の感受	.424	**	.576	**	.236	*	-		
Ⅴ. 反復性	.384	**	.769	**	.219	*	.548	**	-

* $p < .05$, ** $p < .01$

２）構造方程式モデリングによる分析

私的自己意識および自己没入を説明変数、注意、体験の感受、反復性を目的変数とした構造方程式モデリングによるパス解析を行った（図 1）。適合度指標からはモデルの適合について大きな問題は見受けられなかった（χ^2（10）= 236.708, $p < .0001$, CFI = 1.000, RMSEA = .000）。重要な結果として、私的自己意識は注意を有意に予測するのに対し（標準化解 = .546, $p < .0001$）、体験の感受および反復性は予測しないことが明かとなった（それぞれ標準化解 = .139, p = .145; − .086, p = .251）。一方、自己没入は体験の感受と反復性を有意に予測するのに対し（それぞれ標準化解 = .496, $p < .0001$; .818, $p < .0001$）、

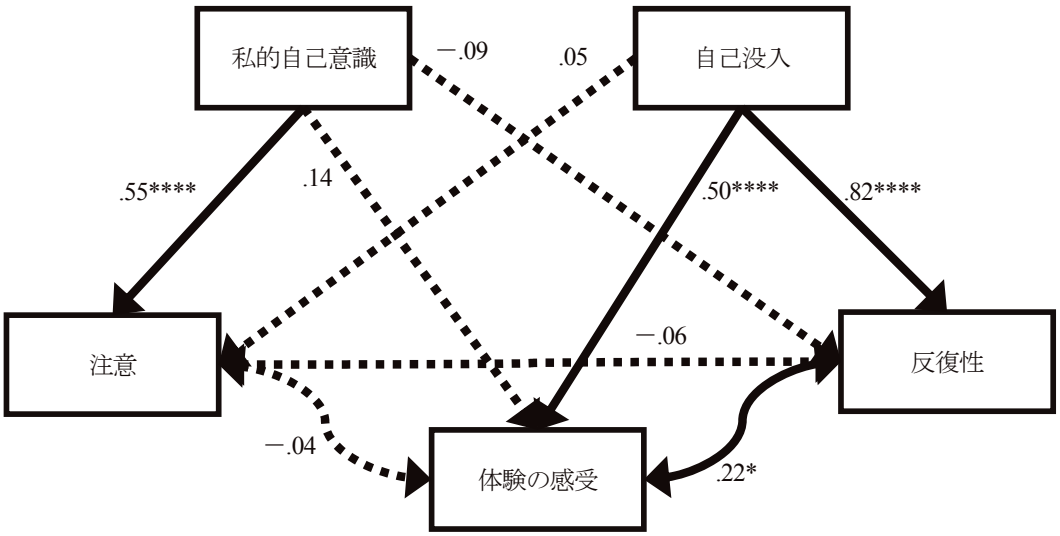

図 1. 構造方程式モデリング結果

* $p < .05$, ****$p < .0001$
Note. 外生変数同士の相関、および従属変数の誤差項は省略した。破線は非有意のパスを示す。

注意は予測しないことが明かとなった（標準化解 = .054, p = .573）。また、反復性と体験の感受との偏相関[1]は pr = .220,（p = .026）と有意であったが、体験の感受と注意、反復性と注意との偏相関は非有意であった（それぞれ pr = − .040, p = .680.; − .062, p = .519）。

考察

（1）相関分析、および私的自己意識・自己没入を上位概念としたモデル検証結果から

本研究の目的は、反復性と注意、および反復性と体験の感受の間の正の相関関係の追試、および新たなモデルの検証、つまり私的自己意識と自己没入を上位概念とし下位概念としての反復性、注意、および体験の感受にどのように影響しているのかを明らかにすることであった。1つ目の目的に関わる点で、反復性とフォーカシング的態度の特定の因子との正の相関が再び見られるかどうかの問題については、先行研究（髙沢 , 2021; 上西 , 2012）と一致した結果であり再現性のある現象と言えよう。さらに、反復性と注意の相関係数は髙沢（2021）によると .225 であり、本研究の .219 とそれほど大きな乖離はない。一方、反復性と体験の感受との有意な正の相関に関して、上西（2012）の結果と本研究の相関係数 r = .548 では若干の開きがあるように見受けられる[2]。ただし、これらの相関係数同士の有意差検定を行うことができないため、この議論については後続の研究へ譲ることとする。

続いて2つ目の目的に関わる結果では、ポジティブともネガティブとも限定しない全般的な自己の内面への注意である私的自己意識は、フォーカシング的態度の注意のみに影響を与えること、（否定的）自己への注意の持続を意味する自己没入は体験の感受や反復性を有意な影響を与えることが示唆された。反復性と注意との偏相関が非有意になったことは、単相関の結果と大いに異なる。モデル内には自己没入のようなネガティブな自己の側面への注意持続が含

1　標準化偏回帰係数による。以下、本論中の「偏相関」とは同様のことを指す。
2　上西（2012）による反復性と体験の感受との相関係数については原典を参照のこと。

まれているが、こういった変数の影響を統計的に統制しながら各変数同士の影響・被影響関係を見ると、偏相関の結果からは一見似た概念であっても注意の向け方、ひいては体験の仕方やあり方という点でこれらの概念が明白に異なることを示している。一方、フォーカシング的態度に類する日常生活におけるフォーカシング的経験であっても、体験の感受は単に自己の内面への注意を向けることでは説明できず、むしろネガティブな側面に注意を向け続ける自己没入によって説明される概念であることが示唆された。ただし、反復性と体験の感受との間の正の偏相関が有意のままであったことから、反復性と体験の感受との共分散の原因を自己没入だけでは説明しきれていない可能性を否定できない。髙沢（2021）も指摘するように、体験の感受の質問項目内容に立ち返ってみると、心身症様の経験を捉えている可能性もあり、今後さらなる検討を重ね両概念の重複がどのように生じるのか検討すべきであろう。

以上のことから、フォーカシング的態度の注意や日常生活におけるフォーカシング的経験の体験の感受、および構造拘束的な体験様式の反復性では、単純な単相関で有意な正の相関関係が見られたとしても、その正の相関関係の源泉は異なることが示唆された。また、ポジティブかネガティブかに関わらず自己の内面への注意を向ける私的自己意識は、一見、反復性や体験の感受とも概念的重複が見られるが、構造方程式モデリングのように変数同士がお互いの影響を統制し合う解析方法によると、単純に「自己の内面への注意」という共通項だけでは反復性や体験の感受との関係性を括れないことが明かとなった。

（2）本研究の限界と今後の課題

上述の通り本研究では反復性と体験の感受との偏相関が有意なままとなり、自己没入だけではその関連性の源泉を絞り込むことはできなかった。そのため、今後は心身症様の体験を含めたより精緻なモデルを組み検証することが求められる。もう一つの今後の課題としては、日常生活におけるフォーカシング的経験は既に新しい尺度（FES-TR；上西，2020）が開発されており、反復性を始めとした構造拘束的な体験様式とどのような関連性が見られるかについて検討すべきであろう。

謝辞

九州産業大学の森川友子先生から FMS-18 の注意因子、関西大学の上西裕之先生から FES の体験の感受因子、それぞれの英語名をご教授頂きました。また本学の豊住誠先生、クリストファー・メイヨー先生から英文アブストラクトについてのご助言を頂きました。この場をお借りして御礼申し上げます。

引用文献

福盛英明・森川友子 .（2003）. 青年期における「フォーカシング的態度」と精神的健康度との関連「体験過程尊重尺度」（The Focusing Manner Scale; FMS）作成の試み . 心理臨床学研究 , 20, 580-587. https://ci.nii.ac.jp/naid/40005722773

Gendlin, E. T.（1964）. A theory of personality change. P. Worchel & D. Byrne. Eds., *Personality change*, 100–148. John Wiley & Sons. http://previous.focusing.org/pdf/personality_change.pdf

Gendlin, E. T.（1981）. *Focusing* 2nd Ed. Toronto: Bantamn Books.

Krycka, K. C., &Ikemi, A.（2016）. *Focusing-oriented–experiential psychotherapy: From research to practice*. In D. J. Cain, K. Keenan, & S. Rubin（Eds.）, *Humanistic psychotherapies: Handbook of research and practice*（p. 251–282）. American Psychological Association. https://doi.org/10.1037/14775-009

増井武士 .（1990）. フォーカシングの臨床適用に関する考察―その新しい視点と将来的な課題について―. 人間性心理学研究 ,8, 56-65.

森川友子・永野浩二・福盛英明・平井達也 .（2014）. FMS（The Focusing Manner Scale）改訂版の作成および信頼性と妥当性の検討 , 九州産業大学国際文化学部紀要 , 58, 117-135. https://ci.nii.ac.jp/naid/40020224215

中谷隆子・杉江征 .（2014）. 日常的フォーカシング態度尺度の開発およびその信頼性・妥当性の検討―内的プロセスモデルの検証 . 心理臨床学研究 , 32, 250-260. https://ci.nii.ac.jp/naid/40020151173

坂本真士 .（1997）. 自己注目と抑うつの社会心理学 . 東京大学出版会

清水裕士 .（2016）. フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 . メディア・情報・コミュニケーション研究 , 1,

59-73. http://hdl.handle.net/11150/10815

末武康弘 .（1986）. 人格およびその変化をめぐる理論的課題－ロジャーズ派人格理論の推移の検討を中心として . 教育方法学研究 , 7, 139-159.https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=23499&file_id=17&file_no=1

髙沢佳司・伊藤義美 .（2009）. 構造拘束度尺度の作成および妥当性・信頼性の検討 . 心理臨床学研究 , 27, 603-611. https://ci.nii.ac.jp/naid/40016946521

髙沢佳司 .（2018）. 構造拘束度尺度の改訂および妥当性・信頼性の検討 . 愛知学泉大学・短期大学紀要 , 53, 81-91. http://id.nii.ac.jp/1155/00001026

髙沢佳司 .（2021）. 改訂構造拘束度尺度の妥当性に関する追加検証 . 皇學館大学紀要 , 59, 59-75. http://id.nii.ac.jp/1543/00000427/

辻平治郎 .（1993）. 自己意識と他者意識 . 北大路書房

上西裕之 .（2011）. 日常生活におけるフォーカシング的経験の構造に関する一考察－フォーカシング的経験尺度の開発とその構造の分析－ . 関西大学心理臨床カウンセリングルーム紀要 , 2, 91-100.http://hdl.handle.net/10112/4887

上西裕之 .（2012）. 日常生活におけるフォーカシング的態度と構造拘束度との関連 . 関西大学心理臨床カウンセリングルーム紀要 , 3, 65-73. http://hdl.handle.net/10112/8023

上西裕之 .（2020）. 日常生活におけるフォーカシング的経験尺度テキスト改訂版の検討 . 関西大学心理臨床センター紀要 , 11, 11-21. http://hdl.handle.net/10112/00019913

Why do some factors in the focusing attitude positively correlate with repetitive manner? Evidence from a model that includes private self-consciousness and self-preoccupation as superordinate concepts

Keiji TAKASAWA（Kogakkan University）

Abstract

Recent research has suggested that the repetitive manner in the Scale for Structure-bound (Experiencing) positively correlates with attention factor in the Focusing Manner Scale-18 and with sensitivity to experience in the Focusing Experiencing Scale. To investigate what causes these correlations, the present research first replicated the correlations and then conducted the structural equation modeling（SEM）, with private self-consciousness and self-preoccupation as superordinate concepts to repetition, attention, and experience sensation. Correlation analyses revealed that, as demonstrated in prior studies, repetition positively correlated with attention and with sensitivity to experience. In contrast, the results of SEM showed that private self-consciousness only affected attention but self-preoccupation influenced repetition and sensitivity to experience. Moreover, the standardized partial regression coefficient between repetition and sensitivity to experience remained significant. The underlying processes of the positive correlations between repetition and attention, and sensitivity to experience are discussed.

Keywords：tstructure-bound manner, focusing manner, repetition, private self-consciousness, self-preoccupation